

JFC ネットワーク・スタディツアー 2011

2011 年 9 月 2～9 日まで 7 泊 8 日でスタディツアーを行いました。参加者して下さった方々の感想をご紹介します。◆一番印象に残ったプログラム。■感想。

【日程】

9月2日（金）AM成田発 PMマリガヤハウスにてオリエンテーション

9月3日（土）AM/PM: JFCの子どもたちとのワークショップ at エコパーク

9月4日（日）AM国籍確認訴訟原告団との交流会、PM貧困地区スモーキーマウンテン訪問

9月5日（月）AMダバオへ移動、PM COW^(※)にてオリエンテーション、ホームステイ

9月6日（火）AM/PM: ホームステイ先で過ごす

9月7日（水）AM/PM: 家庭訪問、夜: ソリダリティナイト・COWの母子とのお別れ会

9月8日（木）AM: お買い物、PM: マニラへ移動

9月9日（金）AM: 帰国

(※) COW: Religious of the Good Shepherd - Center for Overseas

JFC ネットワークでは、2007 年度からはじめての試みとして、ダバオの NGO、RGS-COW で相談を受け付けたケースも扱っています。COW はフィリピン人移住労働者の帰国サポートや安易な海外就労に対する啓発活動、人身売買防止活動などを行う団体です。

◆スモーキーマウンテンツアー

【理由】やはり現実的に圧倒される。それとショッピングセンターなどとの格差もあまりに大きい。あと、国籍確認訴訟の原告との交流会でJFCの法廷発言を再現してくれたのはよかった。

■子どもたちが素直で元気なのは、どこの国でもそうだとは思いが印象に残った。JFC の生の声をもう少し聞く機会がほしかった。ただ、たっぷり一緒にいる時間があつたので、個別に何人かに話しかけて、日常生活のことや考えを聞いた。とにかく当事者と多くの時間を過ごせたのが最大の収穫だった。日本から来ている大学生インターンと会えたのもよかった。ぜひ国際的視野で活躍してほしい。参加者にも恵まれた。一人一人経験が多様で会話も楽しい。この人たちとのつながりの中からまた何か生まれればと思った。うしたツアーに、日本の大学生ももっと参加してほしいと思った。国際社会学の分野の学部生や院生を中心に宣伝するべきだと思う。また、日本にいる JFC にもいつか参加してほしい。(マニラのみ参加／匿名希望/大学教員)

◆「東日本震災被災地へのビデオレター」ワークショップ

【理由】互いに話し合い、共同で作業することで、JFC やその母親との交流を深



めることができた。直接フィリピンの母子と出会う機会は貴重だ。また、一昨年訪れた気仙沼の津波前の風景記憶を絵に描き、ビデオの前で話すことで癒されました。フィリピンで、こういう機会があるとは思ってもいなかった。

■今回のツアー二日目は、集まった数十人のJFCの母子と、エコパークという亜熱帯の森の公園で、ワークショップを行った。午前中は、マリガヤハウススタッフのクリスティンさんの指導で、体を動かし、にぎやかにゲームをしたりして交流を深めた。フライドチキンとライスのランチの後、午後は、3月の東日本大震災の被災者へのビデオレターを作成した。この企画は、マリガヤハウスでインターンをしている4人の日本人大学生が立てたものである。JFC、母親、ツアー参加者が、5、6人のチームに別れ、大学生のファシリテートで、震災への感想や意見を述べ合い、それから、画用紙に、思い思いの被災者への励ましの言葉や絵を描く。そして、一人々がビデオの前で、絵を見せながらメッセージを述べ、ビデオレターを完成させた。

わたしは、震災のときに職場から20キロ離れた自宅へ徒歩で帰った話しをした。また、一昨年の夏に旅行で訪れた三陸の思い出を絵に描いた。フィリピンに来て、震災について、何か話題にはなるだろうとは予想していたが、こういう形で体験や記憶を表現する機会があるだろうとは。改めて心が癒される思いだった。

JFCたちや母親の感想を聞くと、地震のニュースをテレビで見たからだろう、「津波は怖い」とか「日本人は強いから大丈夫」といった内容であった。言葉の問題もあるかもしれないし、例えば親族が被災地にいれば、また違っていたのかもしれないが、発生からすでに半年が経過し、日本人を親族として持つ彼らでさえ、マスコミに伝えられる以上の関心を持ち、想像することは難しいようだ。これは、日本から、フィリピンJFCの立場や心情に関心を持ち理解するには、何か強い個人的なきっかけ(例えば、スタディーツアーに参加すること)が必要なのと同様かもしれない。

(マニラのみ参加/匿名希望/会社員)

◆ダバオでのホームステイおよび家庭訪問。

【理由】実際の家庭をみることでJFCの子ども達がどのような生活をしているのか知ることができた。本当に、不衛生な狭い家で生活している家族もあり、フィリピンの女性が日本に働きに行くことを望む理由がよく理解できた。

■事務所の弁護士に勧められるがままに参加をし、高い期待はしていませんでしたが、期待の何十倍もよかったです！ フィリピンの本当に貧困な事情を見ることができました。スモークマウンテンでゴミを食べながら生活する人たち、道端のハエのたかる家で生活する人など、過酷な現状をみて、フィリピンの女性が日本に憧れ、日本人男性と結婚したがる理由が分かりました。そして、夜にフィリピン女性を連れてマニラを歩く日本人集団をみてJFCが、なぜできるのかも分かりました...同じ日本人として、恥ずかしい思いです。

JFCのお母さん方は明るく、元気な方ばかりでした。マリガヤハウスでもCOWでも歓迎していただきました。ソリダリティナイトでは一緒にダンスも踊りましたし♪楽しいひと時でした。帰国してからもホームステイ先のJFCとメールでやり取りをしています。この旅で、色々な人に出会い、人間関係も広がりました。COWのお母さん方の手作りのキャラメルとミルクシーを事務所のお土産に購入しましたが好評です。

8日間、つきっきりで案内してくださった河野さんをはじめ、JFCネットワークのスタッフの皆様、ありがとうございました。JFCの事件があれば、またご紹介ください。

(高坂明菜さん/弁護士)

◆家庭訪問。

【理由】 実際に話をきくことが出来たから。

■フィリピンに行くこととJFC ネットワークのスタディーツアーに参加することは初めてでしたが大変有意義な時間を過ごしました。本を読んだだけでは分からなかったことが、スタディーツアーに参加して実際の関係者の話を聞いてよく分かりました。JFC と JFC のお母さんと一緒に色んな活動をして一生懸命生きて行こうとするお母さんの強さを感じ、私にとって研究の為だけではなく、いい人生経験でした。

(Frederic Roustan / フレデリック・ルスタンさん/大学院生)

◆スモーキーマウンテン見学

【理由】 なかなか訪問できないところに訪問できたことがひとつと、家庭訪問などで直接そこに住む人々に自由にインタビューできたことが印象に残りました。通訳を介して、くわしい話が聞けたことなどで、ただ見学するだけでなく、生活実態を詳しく知ることができたため、印象深いプログラムでした。

■JFC のスタディーツアーに参加したのは、初めてでしたが、とても充実した1週間を過ごすことができました。国籍訴訟等、日比間の課題に関する学びも多くありましたが、ワークショップを通した子ども達とのふれあいや観光、おいしい食事など楽しい経験も多かったところが良かったです。

特に、スモーキーマウンテンやダバオでの家庭訪問で、個々人の生活の実態をありのままに知ることができたのは、貴重でした。資料やレクチャーに加え、実際に訪問したことで、より身近な問題として理解することができたと思います。訪問を受け入れて下さった方々にとても感謝しています。また、こうした訪問の機会をアレンジしてくださった、関係者の皆さまにも感謝しています。

今回のスタディーツアーで、フィリピン社会の日常を一部垣間見たことで、日本社会での多文化理解の重要性や奥深さを痛感しました。日本でも、この経験が役立つと思います。ツアーでお世話になった関係者の皆様、参加者の皆さま、ありがとうございました。

(西口里紗さん/NGO スタッフ)

◆ダバオでのホームステイ。

【理由】ホームステイ先の家庭のJFC の事情や、生活の様子、人間関係などを見ることができました。貧しさと共に、日本にはない人間関係の豊かさも見ることができました。ホームステイは毎回緊張しますが、やはり毎回、「行ってよかった」という気持ちになります。

■今回はダバオからの参加で、前半のマリガヤハウスのワークショップ(国籍確認訴訟原告団との交流会)に参加できなかったのが残念で



ワークショップ at エコパーク

した。毎回、フィリピンサイドの人々のもてなしに感謝しています。他方で、特にダバオのケースがなかなか進捗しないことが気がかりです。COWDI とマリガヤハウス、東京事務所の連携がうまくできれば、と思います。
(ダバオのみ参加／近藤博徳さん/弁護士)

◆ダバオでのソリダリティナイト。

【理由】たくさんのJFCやそのお母さんたちと一緒に歌って踊って、本当に楽しかったです。国籍も、肩書も年齢も関係なく、みんなでひとつになって楽しめたのでよかったです。みんなが困難な状況にあっても、歌って踊って楽しんでいる様子を見て、私もとても元気になりました。私たちのダンスも、みなさんに楽しんでもらえたようで、うれしかったです。

■このスタディーツアーでの経験は、とても貴重なものとなりました。たくさんの JFC やお母さんたち、また日本の JFC ネットワークの方と出会いは忘れることができません。とても楽しかった思い出がたくさんある一方で、実際に JFC 家庭の生活状況を見たり、話を聞いたりしてショックを受けたこともありました。ここで学んだことを、私なりに考え次に活かしていきたいと思います。

(ダバオのみ参加／松本真菜実さん/大学生・マリガヤハウスインターン)

◆ ソリダリティーナイト

■ダバオの COW のみなさん・JFC のお母さん方、皆さんが、とても温かく迎えてくれました。厳しいであろう経済状況にもかかわらず、豪華な料理を振る舞って下さったり、交通費などもすべて払おうとしてくれたり、「これで大丈夫なのかな？」と感じることが多くありました。また、家庭訪問の際、訪問先の方のバックグラウンドに関して話を聞いていて感じたのが、Maligaya House などのサポート団体の介入が難しいケースも多くあるということです。やはり、一番強く感じたことは、アクティビティーなどを、JFC のみんな・JFC のお母さん方やみんなと一緒に純粋に楽しむ、というだけで、精神的な距離が少なからず縮まったように感じました。

(ダバオのみ参加／八重代涼介さん/大学生・マリガヤハウスインターン)

◆Solidarity Night

【理由】初めは少し距離があったが、後半では JFC、母親たち、参加者の方たちが皆仲良く一体となって楽しめたから。

■ スタディーツアーを通して、JFC の抱える問題をはっきりと目にし、理解が深まりました。見たからには、知ったからには責任があります。もっと多くの人に彼らの存在を知ってほしいと強く思いました。また、マニラと比べて、同じ国とは思えないほどダバオは落ち着いていて、のんびりできました。

(ダバオのみ参加／八野井めぐみさん/大学生・マリガヤハウスインターン)



ソリダリティナイト